

ヤドリギ

北勢中央公園や菰野町内の各所には、ヤドリギという寄生植物が見られます。ヤドリギは雌雄異株で、エノキ、ケヤキ、ミズナラ、サクラなどの落葉広葉樹に寄生します。種子の散布にはレンジャク類などの野鳥が一役買っています。



ヤドリギの雄花序。3月上旬に開花し、先は4裂する。



ヒレンジャクは冬鳥として群れで飛来するが、近年は数が少ない。ヤドリギの実を好んで食べるが、粘液質は消化されないので、種子が糸を引いた状態で排出され種子を分散させる。

ソメイヨシノについた多数のヤドリギ。



液果は7mmほどの球形で、冬に黄熟する。果肉は強い粘液質。



枝に張りついた種子。



芽を伸ばし始めた若木。



枝は1年に1節だけ伸び、2~5又に分かれる。どんどん分枝するので、次第に球形になる。2又分枝を続けると、まるでトーナメント表のようになる。



ヒノキバヤドリギはモッコクやソヨゴなどの常緑樹に寄生する。



ヒメムカシヨモギ



オオアレチノギク

コラム 身近な雑草の名前を知ろう

左の写真のような植物を見たことはありませんか。造成地や道端、空き地などいたる所に生えていて、誰もが知っているのに名前を知らない雑草の代表が、ヒメムカシヨモギとオオアレチノギクと思われま。前者は北米原産、後者が南米原産の帰化植物。キク科の2年草という点も同じ。ロゼット(P77)で越冬し、春から夏にかけてグングン成長し、人の背丈ほどになる。両種はよく似ているが、よく見るとヒメムカシヨモギは茎からほぼ同じ大きさの葉が出て、黄緑色を帯びる。対してオオアレチノギクは、葉のつけ根から短枝が伸び小さい葉を付けるので、茎から大小さまざまな大きさの葉が出ているように見える。また、色も暗緑色と少し異なる。両種とも綿毛の種子を飛ばし、種子散布力は強力。また、造成地のような土地は肥料分が少なく、乾燥したり温度差が大きかったり植物にとっては過酷な環境ではあるが、彼らは最初に侵入する先駆植物と言える。身近な植物を認識することは、自然観察の大切な一歩だ。



ヤマモモは暖地に生える常緑高木。果実は7月頃暗紅色に熟す。甘酸っぱい味で生でも食べられる。ジャムや果実酒にも適している。



ヒメコウゾはクワ科の落葉低木。実は6月に熟して食べられるが、口の中に違和感が残る。樹皮は強い繊維質で和紙の原料として使われる。



マグワの黒くなった実は甘くておいしい。昔の子どもたちのおやつ。紫色の汁が付くので要注意。



ノビルは冬から春に球根を引き抜き、熱湯で軽く茹で、水にさらして酢味噌などで食べる。



ナズナは春の七草の一つ。早春のまだ蕾つぼみくらいの時期に茎ごと摘み取る。茹でれば癖がなく、いろいろな調理方法でおいしく食べられる。



ベニバナボロギクの若苗は熱湯に通し水にさらすと食べられる。味はやや苦みのある春菊といったところ。



ゲンゲは若葉を摘み取って、てんぷらやあえ物、酢の物などにする。花の根元を吸うと甘い。

ハコベも春の七草の一つ。茹でてあえ物や汁の実、漬け物などができる。

食べられる草や木の実

普段、スーパーで買うことができる野菜は、大抵同じ種類のものばかりです。しかし、野外には食べられる植物がたくさんあり、未知の味や食感が体験できるかもしれません。昔、物の無い時代には普通に子どものおやつになっていた味に再会してみませんか。



フユイチゴの実は初冬に熟して、ちょっとしたデザートになる。



オニグルミの種子は山の獣たちの大切な餌となる。生でも食べられ、栄養価が高い。



サンショウの若芽は「木の芽」とも呼ばれ、和食には欠かせない上品な香り。手の平でパンツと叩いて香りを出す。



スタジイのドングリは少し甘味があり、生でも食べられる。少し炒ると更においしい。

タンポポの仲間

タンポポは人々によく親しまれている身近な野草です。しかし、タンポポは研究対象としても重視され、タンポポ学会が作られているほどです。タンポポには在来のものと外来のものがあり、四日市の在来種はカントウタンポポとする説もありますが、雑種もあるので在来タンポポと表現します。

シロバナタンポポは唯一白いで識別は容易。葉もやや緑色が薄い。西日本に多く、地域によってはタンポポは白いのものと思いついでいる人もいます。花は春と秋に咲く。



左から、シロバナタンポポ、在来タンポポ、セイヨウタンポポ。花全体を包む緑色の部分を総苞という。在来種の総苞は反り返らない。在来タンポポは春にだけ咲く。



セイヨウタンポポの花の断面。舌状花が70～150個程度ぎっしりと並んでいる。



花弁の先端は5つに分かれ、合弁花の仲間だと分かる。



セイヨウタンポポの全景。蕾は低く、開花後の花茎は一旦倒れて、綿毛を飛ばす時には一気に立ち上がる。花は春に多いが、ほぼ一年中咲く。



シロバナタンポポの舌状花と引き抜いた雌しべ(右)。

種子の赤い外来のタンポポはアカミタンポポという。



セイヨウタンポポの瘦果。開花後、花弁や雄しべは脱落して萼と子房の間が伸びて萼が綿毛になる。



セイヨウタンポポの発芽。双子葉植物なので子葉はやはり2枚。



立ち上がったセイヨウタンポポの綿毛。周囲の草が高いとより高く伸びる。これは少しでも遠くまで種子を飛ばそうとするタンポポの進化。



虫えい

ちゅう

虫えいは虫こぶやゴールとも呼ばれ、主にアブラムシ類、タマバチ類、タマバエ類などが植物にホルモン異常を起こさせて組織を肥大化させてできます。虫えいの中で生活するアブラムシには驚くべき複雑な生活史があります。



エノキハトガリタマフシはエノキタマバエが形成する。内部の虫室は広く、1幼虫がいる。

エノキタガリタマバエは5～6月に虫えいごと落下して、幼虫状態で夏、冬を過ごす。



クリメコブズイフシはクリタマバチが形成する。1940年頃、中国から侵入。クリに被害を与える。



エドヒガンハベリフクロフシは長さ3cmほど。ヒガンザクラコブアブラムシが作る。越冬した卵から生れた幹母(下の写真の黒い個体)は第2世代有翅虫を産み、6月下旬に虫えいの隙間からヨモギに移住する。ヨモギの地下茎先端で吸汁し、アリと共生する。秋に有翅産雌虫を生じ、サクラに戻る。



クヌギエダイガフシはクヌギエダイガタマバチが形成する。秋に出た成虫が花芽に産卵する。



イヌツゲメタマフシはイヌツゲタマバエによってできる。内部には数個のU字形をした幼室がある。



エゴノネコアシはエゴノネコアシアブラムシによってエゴノキに作られる。10個ほどの虫室(写真右上は断面)が輪のように並ぶ。4月上旬に孵化した幹母1齢幼虫は虫えいの所有を巡って戦う。締め出された1齢幼虫は天敵に対して防衛にあたる。6～7月に虫室の先端が裂開し、有翅虫がイネ科のアシボソに移住する。



ヌルデミミフシはヌルデシロアブラムシが作る閉鎖型虫えい。秋に脱出した有翅虫はチョウチンゴケに移る。虫えいは薬用や染料に利用される。



ナラメリンゴフシはナラメリンゴタマバチがコナラやミズナラに作る。



イスノキエダナガタマフシはイスノフシアブラムシが作る。11月に有翅胎生虫がアラカシなどに移住する。

公園や庭先のクモ

よく見ると身の回りには多くの種類のクモが生活しています。小さなクモはかなり目線を低くしないと見えてきません。しかし、網の形や張り方、擬態の方法、クモを狩るハチなど興味深い観察をすることができます。



ワカバグモは花の近くで待ち受けていて、コハナバチの仲間を捕えた。



ギンメッキゴミグモは腹部の銀色が特徴。円網にはかくれ帯を付け、中央で上向きに止まる。



リスアカネを捕えたジョロウグモ。林間に馬蹄円網を張る。網の前後にはバリアーと呼ばれる粗雑な網があり三重構造になっている。



ゴミグモは円網を張り、食べかすや枯葉などを縦に並べたゴミリボンに隠れる。下向きに止まる。

アオオビハエトリは5mmの小型のハエトリグモ。緑色が鮮やか。アリに擬態してアリを捕食する。



クロガケジグモはオーストラリアからの外来種。車のドアミラーや窓枠などの隙間からポロ網を張るので厄介。



アリグモの雄(左)と雌(右)。雄の上顎は巨大。雌は第1脚をアリの触角のように動かすので、アリとほとんど見分けられない。



ジグモは地上から地下まで続く袋状の住居(上)を作る。地上部の上をダンゴムシなどが歩くと袋の内側から噛み付き、袋を裂いて中に引き込む。



ドヨウオニグモは草間に水平から垂直までの円網を張る。



シヨウリョウバッタを捕えたナガコガネグモ。危険を感じると網を揺すり威嚇する。



ヒトリコゲチャハエトリ
体長5mm。
地味な色合いで気づきにくい。

カタオカハエトリの雄は脚がオレンジ色。体長はわずか2.5mm。



花で待ち受けていたアズチグモがハナバチの一種を捕えた。アズチグモは色彩や斑紋の変異が大きい。



ハナグモもアズチグモ同様、花の近くで飛来する昆虫を捕える。腹部の斑紋には変異が大きい。



マメイタイセキグモは投げ縄式の狩りをする希少な種類。第2脚先端から粘球を出し、フェロモンでガを誘引し、粘球をぶつけて捕える。



オスクロハエトリの雌は体長7mmほど。水辺の草上において飛来する虫を捕える。雄は全体が黒色。

家屋内のクモ



チャスジハエトリの雄(左)と雌(右)。アダンソンハエトリ同様、分布を北に広げている種類。



オニグモ【NT】の雌は体長が30mmにもなる大型種。人家周辺に大型の円網を張る。近年著しく減少してきている。



ユノハマサラグモはドーム状の皿網を張る。雄の出現期間は短い。寄生蜂の幼虫が付いていることがある。



ネコハエトリは体長が10mmほど。庭の植え込みなどで見かける機会が多い。斑紋や色彩には変異が多い。



オオヒメグモは人家周辺で最も普通に見られる。不規則網の中ほどに枯葉を吊るして住居にする。



セアカゴケグモは特定外来生物。毒グモとして有名だが、向こうから襲ってくることはない。粘りの強い不規則網を張る。



シロカネイソウロウグモは体長3mm。オニグモ類やジョロウグモの巣において網に掛かった獲物を盗み食いする。



シラホシコゲチャハエトリの雄は体長3mmの小型種。腹部の4白斑が特徴。ジャンプして移動しながら獲物を探す。



ヤガタアリグモの雌は体長5mm。アリに擬態している。2004年に新種記載された珍しい種類。



アダンソンハエトリは温暖化で分布を北に広げている。よくジャンプをする。写真は雄。

アシダカグモは巨大で気味が悪いが、ゴキブリを捕食してくれる力強い味方。



帰化植物

四日市市は昔から港町として栄えたために、海外からいろいろな植物が輸入品に紛れて侵入してきています。また、他の地域に侵入して、国内で拡散した種類もたくさんあります。



ウサギアオイは欧州原産の1年草。高さは50cmぐらいになり、実の形が特徴的。



イモカタバミは南米原産の多年草。近似種が何種かある。



ノボロギクは欧州原産の1年草。セネキオニンなどの塩基を含み、小鳥の餌となる。



キキョウソウは北米原産のキキョウ科の1年草。花期は5月。普通の花が咲く前に閉鎖花をつける。種子は0.3mmの微小種子。



オランダハッカは欧州原産のシソ科の多年草。独特の強い香りがあり、夏に白い花を咲かせる。茎の断面は四角。



エビスグサは熱帯アメリカ原産のマメ科の一年草。葉は主に3対の偶数羽状複葉。花期は夏。種子を煎じてハブ茶にする。



ツルノゲイトウは熱帯原産のヒユ科の一年草。葉の細いものはホソバツルノゲイトウといい水田に多い。

イチビはインド原産のアオイ科の1年草。茎の皮から縄などが作られた。ときに大繁殖する。花期は夏～秋。

セイバンモロコシは地中海原産の多年草。高さ1.8mまで成長する。一度刈り取っても1か月程で元の大きさにまで伸びる。



ヘラオオバコは欧州原産の多年草。夏に70cmほどの花茎を伸ばして目立たない花を咲かせる。





アメリカキングゴジカは熱帯アメリカ原産のアイ科の一年草。葉の基部には托葉と刺状突起がある。花期は夏。



イヌコモチナデシコは欧州原産の2年草。花期は春。道路沿いでよく見かける。



ヒメヒレアザミは欧州原産の1~2年草。ちじれた白毛を密生し、茎にはひれがあり先は鋭いトゲになる。



ヤナギハナガサは南米原産のクマツヅラ科の多年草。アレチハナガサに比べ花筒が長い。別名サンジャク



セッカニワゼキシヨウは白花のニワゼキシヨウに似るが、花の形が異なる。開花時間は11~15時。



オオニシソウは北米原産のトウダイグサ科の1年草。高さ50cmになり、葉の裏面は白緑色。花期は夏~秋。



モンツキウマゴヤシは地中海地方原産の1~2年草。小葉にある赤黒色の斑紋が特徴。1954年に楠町で初めて発見され命名された。



アツミゲシは北アフリカ原産の2年草。栽培してはいけないケシの仲間、見つけ次第駆除しなければならない。



タチズズメノヒエは南米原産の多年草。シマズズメノヒエより大型になり人の背丈ほどに成長する。



ブタナは欧州原産の多年草。葉の両面には硬い毛を密生する。花茎は50cm以上に立ち上がる。花期は春~夏。よく似たヒメブタナは、より小型で葉は無毛。



メリケンムグラは北米原産のアカネ科の1年草。茎は横に広がり長さ60cm。花期は夏。

逃げ出す園芸植物

近年はガーデニングブームもあり、実に多くの園芸植物が売られています。捨てられた球根が根付いたり、種子が散布されたりして帰化植物となっけていきます。種類によっては問題を引き起こす場合もあります。



まさに植木鉢から逃げ出すセダム属の一種。ベンケイソウ科のこの仲間には多くの品種がある。栄養繁殖できるので生命力は強い。



欧州原産のコバンソウは観賞用として持ち込まれた。ドライフラワーになりそうだが、乾くとばらける。



ユウゲシヨウは米大陸原産の多年草。明治時代に観賞用として持ち込まれた。



ムシトリナデシコは欧州原産の1~2年草。茎は粘る。ときに大群落を形成する。



ヒメツルソバはヒマラヤ原産の多年草。種子の発芽力が強い。



マンテマは欧州から江戸末期に持ち込まれた。海岸や川の堤防に多く見られる。



オオキンケイギクは北米原産の多年草。一見きれいな花だが、特定外来生物に指定されている。



ヒルザキツキミソウは北米原産の多年草。昼間も花がしぼまない所から名づけられている。



ヒメキンギョソウはリナリアともいう。地中海沿岸原産。



ツルニチニチソウは地中海原産の常緑ツル植物。成長力は旺盛。



スズランズイセンはスノーフレイクとも呼ばれる。有毒のガラントミンを含む。



ハナニラは南米原産の多年草。葉はニラに似るが有毒植物。

住宅地周辺の哺乳類

住宅地周辺にも色々な哺乳類が生息していますが、ほとんどの種は夜行性なので、その姿を見る機会はめったにありません。人家に侵入してテレビの話題になる種類もあります。



ハクビシンは顔にある白線と長い尾が特徴。木登りが得意で、人家の屋根裏に侵入して問題となることが多い。市域でも山地を除いて、ほぼ全域に分布すると思われる。右は2階のベランダにあったためフン。ミカンやカキを多く食べている。



イノシシによって下からこじ開けられたフェンス。力は相当なもの。



©2010安田 守



崖に掘られたホンダギツネの巣穴。意外に身近な場所にも生息している。



側溝の蓋の隙間から顔を出すシベリアイタチの雌。雄は雌より1.5倍程大きい。ニホンイタチはもうほとんど見かけない。



アライグマ(左上)は特定外来生物に指定されている。尾の縞模様が特徴。タヌキよりも一回り大きい。市域では山地を除き、全域に分布し、人家に侵入して問題となっている。雑食性で、魚やザリガニを好む。足跡(左中)は5本の指がはっきりして子供の手ひらのよう。フン(左下)は、ほぼ円柱形になる。



ホンダタヌキ(以下タヌキ)は、ジブリのアニメでも紹介されているように、市街地の中でもたくましく生活している。果実、ドングリ、昆虫、ミミズ、カエルなど何でも食べる。足跡(右中)はイヌなどで見分けるのは難しい。2010年頃から減少傾向にあり、カイセン病(右下)が原因と思われる。



タヌキはためフンをする習性がある。その場所は様々で、上の写真のようにアスファルト上の事も。白いものほど古いフン。



コラム

コツコツ骨格標本作り



ホンダタヌキの全身骨格標本

中学校の科学部の生徒が、交通事故で死んだタヌキの全身骨格標本作りに挑んだ。全身骨格標本は、理想的な完成形は決まっているが、設計図やパーツの説明が一切ない手さぐり・試行錯誤の作業になる。

骨と聞くと気味の悪いもの、不吉なものと考えがちだが、このように完成した全身骨格を眺めてみると、形の複雑さや一列に並んだ椎骨など案外美しいものだと感じるのではないだろうか。骨はその動物がどのように生活していたのかなど、毛皮をまとった姿では知ることのできないさまざまな情報が詰まっている。皆さんもホネから見る生き物観察を楽しんでみてはどうだろうか。

⑤野生動物は人に感染する病気や寄生虫を持っていると考えて下さい。作業を行うには、それなりの安全対策が必要となります。できれば、このような骨格標本作りをしているサークルやグループに参加することをお勧めします。

キジバトの繁殖

キジバトは留鳥として公園や住宅地でもよく見かけます。多くの野鳥が昆虫を餌とするために春から初夏にかけて繁殖するのに対して、種子を主食とするキジバトには決まった繁殖期がなく、12月でも繁殖することがあります。



キジバトの成鳥は全長31cmあり雌雄同色。首の縞模様と虹彩のオレンジ色が特徴。



9月5日造巢開始。巢材は雄が1本ずつ運び、巢で待っている雌に渡す。キジバトの巢は粗雑と言われるが、基礎は長さ20～40cmの太めの枝(左)、産座には太さ1mm以下のつる(右)を使ってうまく編み込んである。



キジバトの卵は純白。9月9日に1卵目、9月10日に2卵目を産んで抱卵に入った。



9月22日の朝と午後に^{ふが}孵化。抱卵期間は12日と非常に短い。



孵化当日の^{ひな}雛。まだ羽毛が少ないので、耳の穴が見える。



9月28日、孵化後6日でかなりの大きさまで成長した雛。



9月30日、給餌には種子を消化した栄養価の高いピジョンミルクという液体を与える。親鳥の口の中に雛が頭を突っ込んで食べるが、時には2羽の雛が同時に頭を突っ込むこともある。



10月4日、幼綿羽が白髪のように残る大きくなった雛。大きさ的には親鳥と変わらず、巣からはみ出しそう。

10月12日、途中で雌親を亡くし、台風の暴風にも耐えて無事に巣立ちした2羽の雛。カラスに襲われることも多く、繁殖成功率は決して高くない。巣立ち後も数日は親が給餌する。幼鳥にはまだ首の縞模様がなく、虹彩も暗色。



竹巣箱を利用したシジュウカラ

伐採されたモウソウチクを使うと簡単に巣箱を作ることができます。この時、竹を横位置にして使うのが肝心で、縦にすると親鳥が出られなくなってしまいます。シジュウカラ用の巣箱にするには、穴の直径を28mmにします。

シジュウカラの鳴き声にはツープーツーせえずピーという囀りの他に、スチチン、クリッ、ピーチュン、ピッピッ、ジュエなど40以上の鳴き方があり、複雑に使い分けています。また、繁殖にペア以外のヘルパーが加わることがあります。シジュウカラが繁殖してくれると、その興味深い行動を観察することができます。



3月22日に巣作りを開始する。巣作りは全て雌がおこない、ベースにはハイゴケなどのコケを多量に運び込む。



シジュウカラの雄は胸の黒帯が太い。卵が孵化するまでは、縄張り確保に専念する。



3月24日、産座には捨てられた座布団の化学繊維や犬の毛を利用する。3月25日より1日に1卵ずつ産卵に入った。



4月4日抱卵開始、4月21日卵は一斉に孵化した。餌の主力はオビカレハの幼虫。孵化の時期を幼虫の発生に合わせている。



餌にはスギドクガの幼虫も運んで来た。給餌疲れでやつれて見える。



給餌は雄雌共に休みなく続けられる。給餌の2~3回に1回くらいの割で、フンを運び出す。フンは膜で包まれたようになっていて、少なくとも巣から40m離れた場所まで捨てに行く。



オビカレハは集団でいるので、捕りつくすまで餌として運ばれた。



5月8日午前6時50分、巣立ちの瞬間。



孵化後17日目です巣立ちしたので、雛はしっかりしているが、まだ胸の黒帯は薄い。この羽毛は幼羽といい、8月頃に換羽して第1回冬羽になる。

巣に残っている雛に巣立ちを促す親鳥。約5分置きに2~3羽ずつ合計10羽の雛が巣立った。この時間がカラスに狙われやすく一番危険。雛はそれぞれ勝手な方向に飛び出し、親鳥がまとめるのに必死になっていた。



ツバメの仲間

ツバメは東南アジアから夏鳥として渡来し、人家で営巣するのでよく知られている野鳥です。フンを気にする家もありますが、個体数が減少していると言われていたので、営巣したら優しく見守ってほしいものです。ツバメには近縁の種類が何種かいます。



水田で巣材の泥を取るツバメの雌成鳥。成鳥の場合、雄の方が尾羽が長いので、慣れれば区別がつく。



抱卵中や給餌中は雌が夜間も巣に留まり眠る。雄は別の場所で寝る。

巣立ちが近くなると体も親と変わらない大きさになり、巣から溢れそうになる。



親鳥からトンボを給餌してもらう巣立ちが近い雛。産卵数は普通4~5卵。力の強い雛が餌を独占することがないように均等に給餌している。

巣立ちから間がない幼鳥。孵化から巣立ちまでは餌の状態にもよるが、約2週間かかる。巣立ち後もしばらくは親から給餌してもらう。



コシアカツバメは全長が18cmあり、ツバメより少し大きい。名前の通り腰が橙色。夏鳥として渡来する。

橋脚の裏に作られたコシアカツバメの巣群。高層アパートや校舎の軒下に作られることもある。四日市市では、笹川団地より南で見かける機会が多い。



巣から顔を出すコシアカツバメ。ツバメの巣がお椀を半分にした形なのに対して、コシアカツバメの巣はトックリを半分にして天井に付けた形。古巣を修復して使うが、スズメに巣を乗っ取られることも多い。



イワツバメは全長14cmあり、腰が白く尾が短い。夏鳥として渡来し、群れで飛翔しながらジュリリーと濁った声で鳴く。



巣から顔を出すイワツバメの雛たち。繁殖期は5~6月。巣はコシアカツバメと同様の場所に集団で作られる。巣の形も似るがイワツバメの方が短い形。近年、三滝川や海蔵川の橋脚にもコロニーができていて増加傾向にある。

スズメ

スズメは大抵の人が知っている身近な野鳥です。しかし、人によってはスズメと同じサイズの茶色い鳥は、全て「スズメ」にしているかもしれません。スズメについても認識を深めましょう。



枝で憩うスズメの群れ。一般に留鳥と考えられがちだが、幼鳥は他の地域に移動する傾向にある。



秋に水田の二番穂を食べに来たスズメの群れ。繁殖期以外は雑草などの種子を主に食べ、^{たけやぶ}竹藪などで数千羽集まって集団ねぐらをとる。



スズメは全長135～140mm、体重23～27g程度。眼先と喉、頬の下が黒い。雌雄同色。成鳥、幼鳥の判別は難しく、^{くちばし}成鳥でも嘴の根元が黄色い個体もいる。



スズメが減ったと言われる要因の一つに住宅難がある。最近の家には営巣できる隙間がない。道路標識のパイプを巣に利用するし、竹藪箱も穴が30mmあれば利用する。



群れで生活するスズメも4月になるとペアができ、交尾する。



主に穀物食のスズメも子育ての時期はイモムシなどの動物質の餌を与える。



スズメは小鳥類の中では珍しく砂浴びを好む。



スズメが群れで砂浴びをした「スズメ穴」。



雪解け水で水浴びをするスズメたち。冷たさには関係ないのだろうか。スズメの水浴びを目撃する機会は少ない。



ニューナイスズメは冬鳥として少数渡来する。眉斑があり顔の黒い部分がないが識別するのは難しい。

野鳥の食事

全ての動物にとって、餌を食べる事は命を存続させる上で最も大切なことの一つです。野鳥が餌を食べる様子を観察することで、人にとって無用に見える空き地や荒地も野鳥にとっては大切な採餌の場所であることに気付くことができます。



ホオジロは雑草の種子を主に食べるが、雛には栄養価の高い昆虫を与える。



シジュウカラが、両脚でガの繭を大事そうに挟んでつついて食べていた。



公園にいたツグミがサッと近づいてミミズを引っ張り出した。見ているとかなりの高確率で捕える。人にはまねのできない能力。



コゲラがナシの木から幼虫を捕えた。コツコツ木を叩いているのは目にするが、彼らには餌の存在を確信してのこと。



ヤマハゼの実を食べるメジロ。ヤマハゼやハゼノキの実には蠟質があって栄養価が高い。他にもシロハラ、ツグミ、ルリビタキなど多くの鳥が冬の食糧として依存している。



器用に飛びながらセンダンの実を食べるヒヨドリ。枝に止まっては、嘴が届かないのだろう。センダンはムクドリにとっても大切な食糧。



ヤマガラがナンキンハゼの実を食べようとしている。実には蠟質があり、キジバトも好んで食べる。



クロガネモチの実を食べるシジュウカラ。動物質を食べる野鳥というイメージがあるが、植物質のものも食べる。

サカキの実を食べるカワラヒワ。主に種子を食べる種類なので、果肉を無視して種子を食べているのかもしれない。

野鳥が食べる木の実

野鳥はいろいろな木の実を餌として食べます。野鳥が好む植物を育てれば、野鳥を招くことができます。しかし、植物の視点に立つと、野鳥に木の実を食べてもらうことは、種子散布の重要な戦略なのです。



サカキの実もヒヨドリやツグミ類など多くの鳥に好まれる。好まれる順位は高く、年末にはほとんど食べつくされる。



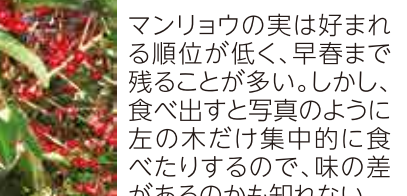
ヘクソカズラの実はつやつやしていてきれい。ジョウビタキやヒヨドリが食べる。



トウネズミモチは成長が早く、すぐに大きくなる。鳥のフンから生えてきても放置してはいけない。



センリョウは野鳥に好まれるので、正月飾りに使うのなら年末までは保護が必要。



マンリョウの実は好まれる順位が低く、早春まで残ることが多い。しかし、食べ出すと写真のように左の木だけ集中的に食べたりするので、味の差があるのかも知れない。



ヒサカキの実はメジロやルリビタキ、ヒヨドリなどの冬場の一番大切な餌となる。林床の青紫色のフンはヒサカキを食べた証拠。



10月下旬、ウドの実は渡ってきたばかりのジョウビタキのご馳走となる。それにしても何んとお行儀のいい食べ方だろう。



トキワサンザシはピラカンサとも呼ばれ、多くの鳥に好まれる。時にレンジャク類が来ることもある。



イロハモミジなどのカエデ類の種子はとても堅いが嘴の力が強いシメは好んで食べる。



エノキの実はムクドリ、シメ、シロハラ、ツグミなどが好む。



クロガネモチの実もツグミやヒヨドリなど多くの鳥が好む。時に鳥どうしの領有権争いが起こる。



サネカズラはビナンカズラとも言い、実はヒヨドリやジョウビタキが好んで食べる。

野鳥が集う庭

ちょっとした庭でも、エサ台を置いたり、水場を作ると野鳥が訪れてくれます。窓越しの場合、野鳥はあまり警戒せず至近距離から観察することができます。四日市の場合、年間で十数種類が観察できます。



半分に切ったミカンはメジロやヒヨドリが好む。代用品として、ジュースや薄い砂糖水でも良い。



ドアミラーに映った自分を攻撃するメジロ。野山で越冬するメジロは群れで行動するが、庭に来るメジロは番の2羽で縄張りを死守する。同一個体が何冬も続けて同じ庭に訪れる場合も多い。



春に大雨が降った後、地中から出てきた黒い大きなヒルをツグミを見つけ、苦勞しながら丸呑みにしてしまった。



エサ台に来たムクドリ。餌台はネコ被害を防げるが、力の強い鳥が独占しやすいという欠点もある。



ジョウビタキは10月下旬に渡来する。雄か雌どちらかが単独で縄張りを張る。1シーズン内に個体が入り替わることもある。写真は雄。



カキの実を食べるスズメ。カキを収穫する時には、鳥用を少し残しておくのが親切。



ヒマワリの種子を食べるカワラヒワ。ヒマワリの種子は、スズメやヤマガラも好む。



ビンズイのような目立たない野鳥が訪れることもあるが、観察力を身につけないと、見逃してしまう。



種子になったナバナを食べるキジバト。ナバナを収穫する時にも一部は種子として残すと野鳥の餌になる。



ヒヨドリもメジロと同様に番の2羽で縄張りを張る。ヒヨドリは雌雄同色だが、全長が雄は275mm、雌は250mmほどなので慣れれば区別がつく。ミカンを巡る力関係では、ムクドリ>ヒヨドリ雄>ヒヨドリ雌>メジロの序列がある。

庭の水場

すべての生き物は水が無くては生きていけません。庭にスイレン鉢や手水鉢があるだけで、いろいろな生き物が生活することができます。



手水鉢はそのままでは深すぎて、野鳥の水浴びには適さない。平たい石を入れて水深を1~2cmにすると良い。



水を飲みに来たシメ。虹彩がまだくすんだバラ色なのと眼先が黒くないので、第1回冬羽の雌と分かる。



落ち葉の上で水を飲むキアシナガバチ。



水浴びをするシジュウカラ。水浴びは水飲み以上にみていて楽しい。他にエナガやジョウビタキもよく水浴びをする。



ニホンミツバチもどこに巣があるのかわからないがやって来る。



メジロはペアでやってきて、交代で水浴びをする。



セグロアシナガバチは夏の暑い日、巣と水場をひっきりなしに往復する。水場はまさにハチにとつての生命線。



喉に流し込むという感じで水を飲むムクドリ。右の棒はトンボ止まり棒。夏になると必ずトンボが止まってくる。



エントツドロバチも時々水を飲みにやって来る。



キジバトはゴクゴクという感じで水を飲む。

水を飲みに来たニホンカナヘビ。舌は淡いピンク色。ヘビ類のように先は2つに割れていない。



花を訪れる虫たち

花の蜜や花粉を求めてチョウやハチ、ハナムグリなど多くの昆虫が訪れます。しかし、そこにはカマキリやクモなどの天敵が待ち構えていて安全な場所ではないのです。



ハルジオンの花に来たクロハナムグリ。幼虫は朽木や腐葉土を食べて育つ。



コブハサミムシは^{ほね}翅が退化して腹部がむき出しになっている。



ヒラタハナムグリは体が^{へんぺい}扁平な体長6mmほどの小型のハナムグリ。



ミカドドロバチはガの幼虫を狩り、既存の穴に運び泥で仕切って巣を作る。



ベニカミキリはタケに産卵するので近年増加傾向。胸部の黒斑には変異がある。



ヒメハキリバチは葉を切り取って竹筒などに詰め込み幼虫の巣を作る。



キタテハの夏型は、秋型(第2集P4)に比べて翅が丸みを帯び、地色も暗くすすけた感じ。



ウツギヒメハナバチの雌は頭がやや角張る。ウツギの開花期と営巣時期が重なる。



シロモンノメイガは黒地に白斑があり識別しやすい。



キアゲハはセリ科のパセリ、ハマボウフウなどを食草とする。海岸部から高山帯まで分布の幅が広い。



アサギマダラは初夏に南西諸島から北上し、秋には南に向かって渡りをする。水色の部分には^{りんぷん}鱗粉がなく、渡りを調べるためにマーキングされていることもある。



ハナゾノツクバネウツギに来たイチモンジセセリ。本種は後翅の銀紋が一行に並ぶ。越冬はできずに、南方から発生を繰り返しながら北上するので、秋に多く見られる。



エゴノキで花粉を集めるクマバチ。幼虫は花粉を食べて育つ。



ヤブガラシの花に集まるアミメアリ。体長は2.5mm。前伸腹節刺は針状に長い。



ミソハギの花で飛来する昆虫を待ち構えるオオカマキリの幼虫。自然界には危険がいっぱい。



ヒメジョオンの花に来たマドガ。日中に活動する種類。



ヤマハゼは雌雄異株。その雌花で蜜を集めるセイヨウミツバチ。



サカキの花に来たニホンミツバチ。サカキは多くの昆虫で賑わう。



ヒャクニチソウの花に来たクロアゲハ。よく似たナガサキアゲハの雄は尾状突起がない。



ウドの花に来たアカスジチュウレンジバチ。5~11月まで発生し、幼虫はバラ属の葉を食べる。

ニラの花に来たサトジガバチ。狩蜂仲間だが成虫は花を訪れる。



タニウツギの花に来たハナムグリ。本種はよく見かけるコアオハナムグリより少し大きく白斑の形が異なる。

ヒメヒラタアブは体長9mmの細い小型のアブ。腹部は橙黄色と黒のストライプで、小楯板はレモン色。



擬態

昆虫の身の守り方 さまざま

下のキタテハに見るように、自然界ではいつ捕食されてもおかしくないほど危険に満ち満ちています。昆虫たちは自分が食べられないように、あの手この手の工夫をしながら進化して生き残ってきました。



クツワムシの褐色型は落ち葉と紛らわしい。写真は産卵管のある雌。緑色型は葉に紛らわしい。



カレハガの幼虫は9cmもあり、枝に張りつくように静止している。



キタテハの翅^{はね}についた左右対称のピークマーク。これは鳥の嘴^{くちばし}から間一髪で逃げられた証拠。



ウラギンシジミの幼虫はフジヤクズの花や蕾^{つぼみ}を食べ、花と同じ色をしている。



ノコメセダカヨトウは背中^{せなか}の淡黄色の線がなければ落ち葉と区別できない。



ムクゲコノハも後翅^{こうし}の赤が見えなければ落ち葉と全く同じ。飛んでも落ち葉の上を選んで着地する。



タイワントビナナフシは枯れ枝^{せんし}にそっくり。前肢と触角は一直線に伸ばす。飛べるナナフシは限られる。分布を拡大させている種。



ヒオドシチョウの表面は派手なオレンジ色だが、樹液を吸うときは翅を閉じて樹皮に化ける。



ルリモンクチバの幼虫は食樹であるジャケツイバラの枝やトゲに色や艶まで見事に擬態している。左下が頭部。

トゲナナフシはバラの枯れ枝のよう。飛べないのでほとんど動かない。



アケビコノハの成虫は色も形も枯葉としか言いようがない。しかし、翅を広げると(右)後翅は鮮やかなオレンジ色に黒い渦巻きがあり、敵を驚かす効果がある。



エグリヅマエダシャクの幼虫は枝になりきっている。成虫は落ち葉に似る。



ショウリョウバッタの雌は8cmにもなる大型のバッタ。緑色の体に褐色のストライプが草むらでは見つけにくくなっている。



セスジツユムシガクズの葉にいと、背中の淡黄色の線も触角も肢も葉脈と同じ色になっている。



トビモンオオエダシャクの幼虫は75mmもある大きな尺取虫。頭部に大きな突起が2つある。まさに枯れ枝そのもの。



コミズクの幼虫はコナラの冬芽に擬態している。カメムシ目に属し、成虫も枝のコブに似ている。



セスジズメの成虫は、前翅の暗色と淡色の線が枯草や茎の影と紛らわしい。



ヤガ科のハイロセダカモクメの幼虫はヨモギの花に見事に擬態している。年1回の発生で、ヨモギの花の時期に幼虫の時期を合わせている。



コマダラウスバカゲロウ【NT】は、ウスバカゲロウの仲間だが、すり鉢状のアリ地獄を作らない。地衣類のかげらを体に付けて通りかかる獲物を待ち伏せる。防御というよりも攻撃的擬態。大顎の影が恐ろしい。



クサカゲロウ類の幼虫はゴミを身にまとい擬態する。右側に大顎が見える。

ハチに擬態



ヤマトヒゲナガハナアブはアブの仲間。腹部の様子はハチに似る。



ハチモドキハナアブはアブの仲間だが、ドロバチ類に似ている。樹液を好んで訪れる。



ヒメアトスカシバはガの仲間。^{はね}翅に透明な部分がある。幼虫はヘクソカズラの茎に虫こぶを作る。6～7月に発生する。

鳥のフンに擬態



アゲハの若齢幼虫は鳥のフンに似るが、5齢幼虫から緑色に変わる。



ユウマダラエダシヤクは住宅地周辺のマサキに発生する。



クワコの幼虫はガの仲間。生糸をとるカイコの野生種。成虫は枯葉に似る。



オガサワラカギバの幼虫もフンにそっくり。幼虫はイヌシデを食べる。

突起・トゲ



ルリタテハの幼虫は全身をトゲで武装するが、人が触っても問題ない。



マイマイガの幼虫(成虫は第1集P51)は多数の刺毛があり、赤や黄、青の派手な色彩は「触るな危険」の意思表示。トゲは指に刺さるが害はない。



トゲヒシバッタは胸部の横にトゲがある。カナヘビ程度なら有効かも。



ヒロヘリアオイラガの幼虫は、カキ、クリ、サクラ、ヤナギなど多くの樹木に発生する。イラガ類はどの種も毒が強く、刺されると激痛が走るので絶対に触ってはいけない。



アオスジアゲハの若齢幼虫には角のような3対の突起があるが、効果の程は不明。

テントウムシに擬態



ナナホシテントウは危険を感じると擬死して、体から黄色いやなニオイのする液体を出すので、鳥などに食べられにくい。



クロホシテントウゴミシダマシは3mmの甲虫。テントウムシに擬態している。その他、クロボシツツハムシ(第1集P15)も同様の擬態。

目玉模様

目玉模様のないイモムシに人為的に目玉模様をつけると、ムクドリに食べられにくいという実験結果が報告されています。



シンジュサンは前翅の先に目玉模様がある。ヤママユの仲間には全てある。



カラスアゲハの幼虫の赤い部分は本当の眼ではない。(成虫は第2集P9)



アケビキノハの幼虫はアケビ類を食べ、派手で大きな目玉模様がある。静止ポーズにも威嚇の意味があるかも知れない。



ハグルマトモエは前翅に大きな目玉模様がある。食樹はネムノキ。



セスジズメの幼虫は黄色や赤の斑紋が7対もある。幼虫はヤブガラシやホウセンカ、サトイモの葉を食べる。

巣を作る



チャミノガの幼虫は小枝を寄せ集めて蓑を作る。雌は一生を蓑から出ないで蛆虫形のままで過ごす。雄の成虫は年に1回6~7月に羽化し、雌の蓑に飛来して蓑の下端から腹部を差し込んで交尾し、雌は蓑の中で産卵する。



ダイモウセセリの成虫。関東型は後翅中央に白帯がなく、近畿以西型には白帯がある。三重県はその中間型。幼虫はヤマノイモの葉を切って折り曲げ巣を作る。



ホソバセセリの幼虫(成虫は第1集P37)は、食草のススキの葉を糸でつづって筒状にし、その中に隠れている。幼虫は6月下旬から7月上旬頃に見られる。

粉を吹く

アゲハモドキの幼虫はミズキ類の葉を食べ、白蠟物質に覆われる。紐状に伸びた部分は触ると脱落する。成虫は(第2集P8)毒蝶に擬態している。



アオバハゴロモの幼虫は粉を吹いて隠れる。

その他の身の守り方



エサキモンキツノカメムシはミズキの葉に産卵し、卵が孵化するまで親が守る。



アフキムシ類の幼虫は植物の樹液を吸い、排泄物から泡を作ってその中に隠れる。



シロオビアワフキの成虫は前翅に斜めの白帯があり識別しやすい。初夏から秋まで見られる普通種。



フクラスズメの幼虫はカラムシやコアカソの葉を食べ、危険を感じると体を激しく左右に振る。



シャチホコガの幼虫はハンノキ、サクラ、ヤナギ類などを食べる。中、後胸脚は細長く伸びて関節で折れ曲がり、歩行には適さないが触ると胸脚を振るわせて威嚇する。



イボタガの4齢幼虫には黒く細長い7本の突起がある。これは一種の威嚇に役立つと思われる。5齢幼虫になると突起はなくなる。幼虫はイボタノキやキンモクセイの葉を食べ、成虫は早春に出現する。



ナガサキアゲハの雌は後翅に白斑や赤斑があり、毒蝶のベニモンアゲハに擬態している。



ナガサキアゲハの終齢幼虫は刺激されるといやな臭いのする突起を出す。この習性は他のアゲハ類にもある。



マメハンミョウはカンタリジンを含む刺激性の液を出す。幼虫はイナゴの卵を食べる。イナゴの減少に伴ってこの種も減っている。



ツバメエダシャクの一種の幼虫は色も形も歩き方もヤマビルにそっくりで、ヤマビルに擬態していると考えられる。



クサカゲロウ類は長い柄のある卵を葉裏に産む。これはアリなどから卵を守っていると考えられる。



ハンミョウ類の幼虫は地面に垂直の穴を掘ってその中に潜み、硬い頭部を蓋のようにして、近くを通りかかる昆虫を襲って餌にする。